

ハドソン川を挟んで

米国コロンビア大学からの便り

4

最終回

経済学部教授

高橋宏幸

Hiroyuki Takahashi

「MATSUI」ライター

背番号「55」、MATSUIそっくりのバットを握りしめた身の丈20cmに満たない首振り人形が、今日も我が家のテレビ台の上で愛嬌を振りまいている。ニューヨーク・タイムス



身の丈20cmの「MATSUI」人形

NYのヤンキー・スタジアムに訪れる日本人観光客は引きも切らない。こうした日本人観光客が記念に買っていくのが先ほどの首

などマスコミ各紙による激辛の松井評もスランプを脱した彼の活躍でこのところ随分下火になり、テレビ

も最近は「マツイ！マツイ！」と騒ぎ立て、日頃野球に関心のない私までもが妙に嬉しくなってしまう。彼の活躍を一目見たいと、日本から

振り人形であるし、背番号55とMATSUIの名の入ったニューヨーク・ヤンキースのユニホームである。結構なお値段がするのがユニホームで、こちらアメリカの野球ファンの場合、野球見物に最肩の選手名と番号の入ったユニホームを着込んで行くわけで、日本とは使い方にかなりの違いがありそうである。

プロ・バスケット・ボール、フットボールと超人気スポーツがある中で、アメリカ人にとってプロ野球は格別のステイタスを持っており、なかでもここニューヨークやニュー

ジャージーではNYヤンキースは圧倒的な人気を博し、子供達までも通学にNYヤンキースの自分のお気に入りの選手名と背番号の入ったTシャツを着込んでいくほどである。松井の活躍はこの小学生や中学生にも影響を及ぼし、松井の背番号を付けたユニホームを着込み、かなりおかしな発音で「マツイ」を連呼し、松井のサインをまねカッコつ

ける少年の姿はなんとも微笑ましい。アメリカでの野球人気は異常とも思えるほどで、日本ではとても考えられない。それだけに松井が次第に本領を発揮し、活躍する場面が増えることは、異国にいる日本人にとっては鼻高々でなんとも心地良く、阪神ファンだった人間すらここではすっかり松井ファンになってしまっている。

モザイク都市 夜の街に銃の閃光

一口にニューヨークと言ってもあの遙か北西に位置するナイヤガラの滝まで広がる広大なニューヨーク州ではなく、マンハッタン島を中心とした狭い範囲にいろいろなのが押し込められ、まるで宝石箱のように燦然と光り輝くニューヨーク市である。しかし、この街も一皮めくれば、建設して100年以上経過した年代物の地下鉄網や下水道網、橋梁、自動車用トンネルの継ぎ接ぎ細工であ



る。そのどれをとってもニューヨークの街とは不釣り合いなほど古めかしく、狭く、不便で、非効率の代名詞のような存在で、まさに人種の坩

堝、犯罪と貧困が同居したモザイク都市を象徴している。八王子の我が家の近くに住む経済学部と同僚の奥さんに、私がコロ

ニュージャージー側からハドソン川を挟んで、マンハッタンの夜景を望む

ビア大学へ在外研究に行くことにしたと告げると、「あそこは昔はとても怖かったよ。コロンビア大学に隣接するモーニングサイトから見下ろしたハーレムの夜の街にピストルを撃つ閃光があちこちに見えたんだから」とかつてコロンビアで学んでいた頃を思い浮かべながら衝撃的なことを言った。私が時折利用する42丁目にある全米最大のポト・オーソリティー・バスターミナルでは、夜中にターミナル内のトイレに入った日本人会社員がそれこそ身ぐるみはがされ、逃げられないよう

素っ裸にさせられてしまったり、エレベーター内で首を絞められ殺されたといった話は幾らでもある。それでも最近は一頃に比べ、大部治安も良くなったようだ。しかし、あのアメリカ史上最大規模といわれる大停電の時がそうであったように、この大都会にはアキレス腱があり、とんでもないもろさを包み隠している。

不便で危なくて なのにエキサイティング

そんな街、ニューヨークに通勤時間帯や金曜の夜ともなれば大変な数の人と車が押し寄せ、交通渋滞は東京の比でない。私のようにニューヨーク市に隣接するニュージャージーから通うものにとつて、通常、バスで50分もあれば到着できるところに2時間半もかかることも再々でバスの中で約束時間に間に合わなくなった乗客があちこちで携帯電話を取り出し連絡を取り合う光景にぶつ

かる。

あてにならないバスに代え、自家用車でこのマンハッタン島に行くことすれば6ドル通行料金をとられた上、駐車場に車を預ければ1時間20ドルもとられ、滅法高くつく。もつとも私の友人に言わせれば、道路のパーキングメーターで駐車していて車の盗難に遭うこともあり、そのことを計算したら決して高くはないそうだ。

安全で料金も騙さず安心して乗れるとお墨付きのイエローキャブにしても、その暴走ぶりには度肝を抜かれてしまう。車間距離を開けず、右、左に移動しながら、追いついていく様はとても安心していられる状態ではない。こうした乱暴なドライバーでさえ赤信号だけはきちんと守っているのに、歩行者の交通マナーは最低で、日常的な信号無視による人身事故が後をたたない。こんなに危なくて、不便でおまけに全てが高くつくのがニューヨークなのに、誰もがニューヨークに魅せられ、エキサイテ



公認会計士の増田要さんと、増田要さんとともに中大OB
増田要さん、増田要さん、増田要さん

イングになる不思議な街である。

活躍する中大OB多士済々

あの「10NY」や大都会を意味する「アップル」が刷り込まれたTシャツや日用雑貨が所狭しと置かれた土産物屋や、夜中も昼間と見間違えるほど明るく派手なイルミネーションが光り輝くミュージカル劇場の集中するブロードウェイ。アメリカを代表する企業や日系企業のオフィスが集中するビジネス街。

このいろいろな表情を持つニューヨークで活躍する中大OBも多士多

オで、かつてはミシン、最近ではファックス、コピー、複写機でアメリカ市場を席卷し、注目されるブラ

ザー・インターナショナルでSenior Vice Presidentを務めるビクター・

田崎さん、世界3大監査法人の1つ

KPMGで監査部門全米代表パートナーを務める間島進吾さんは、い

ずれも商学部出身でアメリカ滞在30

年を超える大ベテランである。最近

ひよんな事から、日本クラブで開か

れる会合で同席させて戴いているJ

R東日本・ニューヨーク・オフィス

所長で、法学部出身の東充男さん。

ちょっと変わったところでは、ハーレムに針・マッサージの治療院「本草閣」を開いているケン・ルー

カス・小林さんがいる。彼は法学部出身でありながら、医学を志しこの道に進み、いまでは、確かな腕と人の気持ちを逸らさない話術で多くの富裕層を患者にするのに成功している。また、ご夫婦揃って理工学部出身で、システム開発の会社社長を務める辻田さん。なんと彼の奥さんは私と同じ小学校の卒業で、お互い品川のそれほど離れていないところに住んでいたことも分かった。

さらに、日本食レストラン、美容

室と手広く事業を展開し、最近では

株式会社アデルランスのチーフ・アド

バイザーとして全米展開に賭ける瀬

宜田雅彦さん。「中大剣道学部の出

身です」というのが彼の口癖で、剣

道でその名を全国に轟かせた経済学

部の卒業である。偶然にも、彼の家

は私が現在住む所から車で5分ともかからない高級住宅地にあり、玄関へのアプローチには黒塗りのベンツのスポーツカーとジャガーが並んで、事業家として成功を物語っている。

女性社長もいる 「ニューヨーク白門会」

こうした並みいるやり手の男性軍に負けないのが経済学部出身で株式会社インターネット総合研究所、財務担当取締役で現在、ニューヨークにあるIRI USA, Inc.の社長を務める新井佐恵子さんである。彼女はかつて公認会計士として監査法人アンダーセンに勤務し、その後インター

ネット総合研究所がマザースに上場

するにあたって引き抜かれたもので、

現在はニューヨークで情報収集やベ

ンチャー・キャピタルとして精力的

に活躍されている。紙幅の関係で、

紹介できなかったOBがこのニュー

ヨーク近辺だけでもかなりの数にな

る。そうした人々を中心に「中央大

学ニューヨーク白門会」が結成されており、会長の田崎さんを中心に一致団結し母校の名誉をかけて活躍されていることは誇りであり、心強いかぎりである。

オフィス街のビジネス・スクール 社会人MBAコースも

コロンビア大学ビジネス・スクール、日本流に言えば経営大学院に客員研究員 (visiting scholar) として身を置いていて感じることは、こうした大都会の大学が持つ立地上の優位性である。とくに、ニューヨークのマンハッタンには一流企業のオフィスが集中し、そこにはまた世界各地



コロンビア大ビジネス・スクールのハリガン教授 (右) と筆者

から選抜されたビジネス・エリートが沢山おり、これをターゲットにさまざまなシンポジウムや会合が開かれる。ともかく猛烈に忙しいこうしたビジネスマンにとって、マンハッタン内にある私立のニューヨーク大学やコロンビア大学は仕事の合間を縫って通えるほどの至近距離にある。実際、前者では昼休みの時間帯に様々な研究会がもたれており、食事を取りながら気楽に参加できるものが

が沢山企画されている。また、後者のコロンビア大学ビジネス・スクールには通常のMBAコースと企業でそれ相応のポジションにある社会人を対象にしたEMBA(Executive MBA)コースの二つが用意され、EMBAのランキングは全米第一位と大変な鼻息の荒さである。両コースの講義

に出席した経験からすると、講義内容、講義回数には両者とも大差はない。しかし、EMBAの場合、通常のMBAコースに比べかなり少人数の学生数のため多少の幅はあるが、1つの講義登録者数は平均して8から15名前後といったって少人数である。また、多忙な社会人の便宜を図って講義を金曜、土曜に集中させ、学生の平均年齢、企業での肩書きともに相対的に高く、授業料に至っては年間約6万ドル(日本円で700万円)という信じられないほど高額なもので、ほとんどの場合授業料は実質的に会社が負担しているようである。ここに入学しなければ、彼らはこれ

ほどまでに親密な関係を築くことはできなかつたに違いない。しかも、アメリカの大学の場合、同窓意識、母校への敬愛の念は予想以上に強く、コロンビア大学ビジネス・スクールの卒業生としての彼らの誇りと団結心がビジネスの世界でも効いてくることになる。

中大生よ、世界に羽ばたけ

今更ながら思うのは、中央大学をこれから卒業する学生諸君に是非とも、例えばコロンビア大学のビジネス・スクール、ロー・スクール、国際公共政策大学院(CIPA)などに挑戦し、世界に羽ばたいて貰いたいということである。そうした中大卒業生の数は、まだまだ少なく、例外的な数にとどまっているのが現状である。目標を定め、それに向けて適切な準備をしていけば必ず道は拓けるはずである。実際、先に挙げた中大OBの中にもアイビーリーグ校のビジネス・スクール進学を目標に、日夜その準備に励んでいる人もいる。また、中大法学部卒で日本で弁護士をされていたKさんも、今年コロンビア大学ロー・スクール卒業と同時にニューヨークで司法試験を受け、国際的な活躍が期待されている。こうした動きが、やがて中央大学国際化の大きな潮流に発展していくことを願って止まない。